

## 〈新刊紹介〉

Michinori Shimoji 著

### A Grammar of Irabu : A Southern Ryukyuan Language

本書は、南琉球宮古伊良部島方言（沖縄県宮古島市）を体系的・包括的に記述した文法書である。複雑な音節構造、韻律システム、代名詞体系など、消滅の危機に瀕する言語の特徴を詳細に記述する。二編の自然談話資料も付されている。

本書の構成は次の通りである。“Chapter 1 The Irabu language and its speakers”, “Chapter 2 Phonology”, “Chapter 3 Descriptive preliminaries”, “Chapter 4 The nominal phrase”, “Chapter 5 Morphology of nominals and adnominals”, “Chapter 6 Verb morphology”, “Chapter 7 The predicate phrase”, “Chapter 8 Property concepts, adjectives, and other derivational processes”, “Chapter 9 Bound markers”, “Chapter 10 The simple sentence”, “Chapter 11 The complex sentence”。末尾には付録として「著者目録」「事項索引」「言語索引」を付す。

(2017年2月発行 九州大学出版会刊 菊判横組み 460頁 10,000円+税 ISBN 978-4-7985-0195-6)

窪菌晴夫編

### 『オノマトベの謎——ピカチュウからモフモフまで——』

本書は、国立国語研究所主催・言語系学会連合共催の第10回NINJALフォーラム「オノマトベの魅力と不思議」（2017年1月21日）と連動するかたちで編まれたものであり、そのシンポジウムの内容を書き下ろしたものも含まれる。研究者のみならず幅広い読者を対象とし、オノマトベに関わる様々な疑問を言語学・心理学・認知科学などの分野から論じる。

本書の内容は次の通りである。「序 日本語にはオノマトベが欠かせない（窪菌晴夫）」に続いて、「1 「スクスク」と「クスクス」はどうして意味が違うの？（浜野祥子）」、「2 オノマトベの意味は変化するの？（小野正弘）」、「3 オノマトベにも方言があるの？（竹田晃子）」、「4 外国語にもオノマトベはあるの？（秋田喜美）」、「5 外国人は日本語のオノマトベを使えるの？（岩崎典子）」、「6 オノマトベはことばの発達に役にたつの？（今井むつみ）」、「7 どうして赤ちゃん言葉とオノマトベは似ているの？（窪菌晴夫）」、「8 「モフモフ」はどうやって生まれたの？（坂本真樹）」。コラムには、「俳句とオノマトベ」「オノマトベとアニメの効果音」「オノマトベと翻訳」「医療とオノマトベ」。末尾に「あとがき」「執筆者一覧」を付す。

(2017年5月18日発行 岩波書店刊 B6判横組み 176頁 1,500円+税 ISBN 978-4-00-029661-8)

伊藤雅光著

## 『J ポップの日本語研究——創作型人工知能のために——』

本書は、著者の連載「ユーミンの言語学 1～46」（雑誌『日本語学』明治書院、1997年4月～2001年7月）を中心としたJポップの歌詞の計量国語学的研究と、創作型人工知能システム研究の成果を示す書である。これらの分析を通して、Jポップの歌詞における「日本語回帰現象」を見出し、その経緯や要因、それを取り巻くテーマについて多角的に論じる。

本書の構成は次の通りである。「第1部 Jポップの言語学」には、「第1章 和風化するJポップ」、「第2章 Jポップはなぜ和風化するか」。「第2部 中島みゆきとユーミンの言語学」には、「第3章 中島みゆきと松任谷由実の歌詞はどちらが豊かか」、「第4章 中島とユーミンの「語り」の文体をさぐる」、「第5章 ナラティブモデルによる中島とユーミンの創作の秘密の解明」。「第3部 男歌と女歌のテーマ分析」には、「第6章 ユーミンは何を歌ってきたか」、「第7章 男性作詞家（シンガーソングライター）は何を歌ってきたか」、「第8章 女性作詞家とアイドルは何を歌ってきたか」、「第9章 男女の作詞家のテーマを比較する」。「第4部 男歌と女歌の語彙分析」には、「第10章 男歌と女歌のことばを計算する」、「第11章 男歌と女歌のことばを分類する」、「第12章 男歌と女歌のことばを分析する」。「第5部 創作型人工知能とは何か」には、「第13章 機械はラブソングを作れるか」、「第14章 機械的にラブソングを作る——失恋ソング生成語彙表の使い方——」、「終章 歌詞創作型 AI 研究の意義」。末尾に「付録「失恋ソング生成語彙表」」「参考文献・楽曲」「索引」を付す。

(2017年5月25日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 214頁 3,200円+税 ISBN 978-4-254-51054-6)

日本近代語研究会編

## 『日本近代語研究 6』

本書は、近代日本語の歴史と構造に関わる論文集であり、その題材と資料は多岐にわたる。本書の構成は次の通りである。「近代語文献の述語部構造分析の方法——地の文と発語文を対比させながら——（小野正弘）」、「『品詞』ということば（服部隆）」、「『教科書』という新漢語の成立と中国語への移入（孫建軍）」、「『日本語大事典』の項目名を英訳して——その作業過程と問題点——（ジスクマシュー）」、「欧文直訳的表現について（八木下孝雄）」、「明治前期の活用表における〈命令形〉（遠藤佳那子）」、「日本語点字のわかちがきについて——学校国文法との関連を中心として——（中野真樹）」、「形容詞「すごい」の程度副詞化——新聞を対象として——（柳橋比早子）」、「『赤い鳥』の童話作品におけるテシマウ・チマウ・チャウの使用について（山田実樹）」、「接尾語「～にくい」「～づらい」の動向——『こち亀』コミックスを例に——（神作晋一）」、「外来語「ヒステリック」と「ヒステリカル」の史的変遷

—文芸作品と新聞における用例から— (木下哲生), 「『近代女性雑誌コーパス』における外来語—定着度の観点から捉える試み— (杉本雅子), 「新資料「ひまわり女学生新用語辞典」—その紹介と“全然”・接尾辞「的」研究への利用— (新野直哉), 「博文館『やまと錦』の文末表現 (田貝和子), 「『英和対訳袖珍辞書』の英文 PREFACE と編集方法について (飛田良文), 「幕末・明治期における形容詞型活用語「て形」の促音をめぐって (上野隆久), 「江戸後期における〈てくれ〉の尊敬表現—「ておくんさい」系、「てください」系、「お〜ください」系— (山田里奈), 「狂詩の漢字語—生酔狂者輯『狂詩礎』の場合— (荒尾禎秀), 「訓訳いわゆる左ルビをめぐって (村上雅孝), 「ドミニコ会文献のアクセント注記と母音単独音節“O”の存在について (岩澤克), 「キリシタン資料における「ものなり」表現について—「教義文体」との関わり— (小島和), 「『倭』の字源と東アジアでのその展開 (佐藤武義)」。末尾に, 「池上秋彦教授略歴・研究業績目録 (抄)」「樋渡登教授略歴・研究業績目録」「索引」「編集後記」「英文タイトル」「執筆者一覧」が付く。

(2017年6月17日発行 ひつじ書房刊 A5判縦組み 480頁 28,000円+税 ISBN 978-4-89476-806-2)

田島優著

### 『「あて字」の日本語史』

本書は、日本語の書記スタイルの歴史の変遷と関連させながら「あて字」の発生について論じた書である。本書は導入編と歴史編から成り、あて字一語の歴史を取り上げたコラムを挟みながらまとめられている。

本書の構成は次の通りである。まず「導入編」には「1 ようこそあて字の世界へ」, 「2 メディアのあて字を眺めてみれば」, 「3 国語辞書ではあて字はどのように扱われているか」。本題となる「歴史編」には「1 異国のことばを書き写す」, 「2 日本語を漢字で書く」, 「3 文字を使いこなす」, 「4 和語と漢語の結びつき」, 「5 自立語を漢字で書く」, 「6 あて字の認識」, 「7 真名で書く」, 「8 整版印刷と振り仮名」, 「9 漢語の口語化と漢字執着」, 「10 西洋との出会いと白話小説」, 「11 漢字平仮名交じり文への統一」, 「12 戦後の国語政策とあて字」。末尾に「おわりに」を付す。コラムには「①時計」「②不憫 (不愍)」「③普段」「④本当」「⑤冗談」「⑥堪能」「⑦容赦」「⑧真逆」が取り上げられている。

(2017年6月23日発行 風媒社刊 四六判縦組み 242頁 2,200円+税 ISBN 978-4-8331-2094-4)

湯沢質幸著

### 『漢字は日本でどう生きてきたか』

本書は、日本人日本語における漢字のダイナミズムを論じた書である。漢文・漢字仮名交じり文には触れず、漢字単位の分析を行っている点が特徴的である。開拓社言語・文化選書第68巻として刊行された。

本書の構成は次の通りである。「はしがき」, 「序章 漢字と日本人日本語との交わり」に続き, 「第1章 日本の漢字」には「〔1〕漢和辞典の語る日本の漢字」, 「〔2〕漢字は表意文字か表語文字か」。「第2章 「形」(1) —生い立ち・成り立ち—」には「1. 「形」—漢字の漢字たる所以—」, 「2. 六書」, 「3. 圧倒的多数の会意・形声文字—旺盛な造字力—」, 「4. 会意と形声」, 「5. 形声のダイナミズム」。「第3章 「形」(2) —増加の宿命—」には「1. 「形」の必然的增加—漢字の宿命—」, 「2. 新字造成—国字—」, 「3. 「形」の多様性—異体字—」, 「4. 漢字政策と「形」」, 「5. 「常用漢字表」の「形」と「音」」, 「6. 人名用漢字」。「第4章 「形」(3) —語表現力とその限界—」には, 「1. 同音異義語の異表示」, 「2. 漢字と同音異義語」, 「3. 「形」の威力」。「第5章 「音」(1) —字音の日本的なあり方—」には「1. 漢和辞典解説項目に見る字音」, 「2. 日本字音—その系統—」, 「3. 「反切に本づく」」, 「4. 日本字音の理論的構築」, 「5. 字音力の拡充」, 「6. 呉音漢音の周辺」, 「7. 呉音漢音の造語力」。「第6章 「音」(2) —字音のダイナミズム—」には「1. 漢字の造語力」, 「2. 呉音漢音と造語」, 「3. 「東」—ツ・トウ:呉音漢音の造語力—」, 「4. 「京」—キョウ・ケイ・キンの小宇宙—」, 「5. 「青」—ショウ・セイ・チンの小宇宙—」, 「6. 造語と1字複数字音」, 「7. 1字複数字音回避」, 「8. 係争中の複数字音」。「第7章 「音」(3) —字訓:日本独自の「音」—」には「1. 字音と字訓」, 「2. 字訓の認定」, 「3. 字訓の成立」, 「4. 訳語・字訓の拡散と収束」, 「5. 制限即保護」, 「6. 訳語と字訓」, 「7. 人名用漢字の字訓保証」, 「8. 字訓の造語力」。「第8章 「音」(4) —字音と字訓の織りなす世界—」には「1. 字音字訓の有無・争い」, 「2. 字音数と字訓数」, 「3. 字音字訓の合体—重箱・湯桶—」, 「4. 字音字訓と造語」, 「5. 字音字訓のダイナミズム」。「終章 漢字はどのように日本人日本語と付き合ってきたか」には「1. 「形」—漢字の宿命の日本化—」, 「2. 「音」—日本化の象徴:字訓獲得—」, 「3. 日本の漢字のダイナミズム」, 「4. 「形」を舞台とする「音」交替のドラマ」。末尾に「参考文献」「索引」を付す。

(2017年6月24日発行 開拓社刊 四六判横組み 360頁 1,900円+税 ISBN 978-4-7589-2568-6)

茅島篤編

### 『幻の日本語ローマ字化計画—ロバート・K・ホールと占領下の国字改革—』

本書は, 日本語表記から漢字とかなを取り去る計画の急先鋒となった連合国軍民間情報教育局の米軍士官ロバート・K・ホール少佐 (Robert K. Hall) に関する代表的資料を通して, ホールの国語改革の全貌に迫ろうと試みるものである。ホールは文部省と占領軍内部の双方にどういった軋轢と混乱をもたらし, どのような影響を戦後の国語改革に与えたのかを辿る。ホールのインタビュー記録も掲載され, 貴重である。

本書の構成は次の通りである。「序」「各章の要旨」に続き, 「第1章 ロバート・K・ホール来日前の日本語表記改革関連文書」, 「第2章 米国教育使節団への国語改革関連文書」, 「第3章 国語改革方針転換となった文書」, 「第4章 ロバート・K・ホールの

回想録・インタビュー記録」「第5章 ロバート・K・ホルの人物像」。末尾に「編著、翻訳・執筆者紹介」を付す。

(2017年6月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 280頁 3,700円+税 ISBN 978-4-87424-737-2)

糸井通浩著

『日本語論の構築』

本書は、著者のこれまでの論文を編成し、一書にまとめたものである。時枝の言語理論を実践した日本語論であり、論文のほか、書評も収められている。

本書の構成は次の通りである。「〔一〕 私の日本語論」には、「一 日本語の哲学」、「二 「こと」認識と「もの」認識——古代文学における、その史的展開——」、「三 古代文学と「さま」認識の発達」、「四 基本認識語彙と文体——平安和文系作品を中心にして——」、「五 「体用」論と「相」——連歌学における——」、「六 場面依存と文法形式——日本語における——」、「七 文末表現の問題」。「〔二〕 日本語の諸問題——語彙・文法・文章——」には、「一 日本語にみる自然観」、「二 語彙・語法にみる時空認識」、「三 過程（様態・対象）と結果——個別研究を包括する研究、の一つの試み——」、「四 日本語助詞の体系」、「五 『手爾葉大概抄・手爾葉大概抄之抄』を読む——その構文論的意識について——」、「六 文章・談話研究の歴史と展望」。「〔三〕 日本語のリズムと〈うた〉——音数律論——」には、「一 和歌形式生成の論理」、「二 「五三七」リズムと三輪歌謡圏」、「三 音数律論のために——和歌リズムの諸問題——」、「四 日本語のリズムと〈うた〉のリズム——「四拍子論」を見直す——」、「五 日本語のリズム」、「六 「日本語のリズム」に関する課題」。「〔四〕 日本語論に関する書評」には、「鈴木泰著『古代日本語時間表現の形態論的研究』」、「藤井貞和著『日本語と時間——（時の文法）をたどる——』」、「根来司著『時枝誠記研究 言語過程説』」、「山口佳紀著『古代日本文体史論考』」。末尾に、「初出一覧」「あとがき」「索引」を付す。

(2017年7月28日発行 清文堂出版刊 A5判縦組み 518頁 12,000円+税 ISBN 978-4-7924-1439-9)